

教育実習における 指導案作成に関する一考察

橘 田 重 男

はじめに

筆者が以前、小学校現場で教育実習生を受け入れた際、指導案（授業案）の指導に多くの時間をかけたが、その指導の難しさを感じた経験がある。指導案作成に関して、教育実習の事前指導や教職科目などでふれられてきているが、指導案を作成するためには実践を想定する総合的な能力が必要とされる。そのため、実習生にとって指導案作成が一番の課題に挙げられてきた。

幼稚園教育実習においても、「指導案の作成は、実習生が難しいと感じる課題の一つである」（大滝2008）と述べているように、本学2年次の教育実習を終えた学生への事後調査においても、「実習中大変だったこと」の一番に「指導案を書くこと」を挙げている。

事前指導において、「指導案を書く」ことに最も多く時間をかけているにもかかわらず、実習生にとっては負担になっていることが窺える。指導案を書くためには、実習先からの指示をもとに、子どもの発達段階などを考慮した教材の選定、季節や行事との関連、実習クラスの実態などを踏まえて指導案を作成することになる。事前のオリエンテーションで、実習生に実習クラスや一日の保育内容などは知らされるが、実習期間に関わる具体的な活動や子どもの様子は分からない部分が多い。そうした状況の中で指導案を考えなければならないため、実習生への負担もかかる。

特に2年次の指導実習においては、部分実習や1日責任実習が課される。その際、「指導案を作成すること」が必須となる。これは実習生にとって大変な負担になるが、取り組んで乗り越えなければならない課題である。また、実習

期間中は指導案に加えて、毎日の実習ノートへの記録をはじめ、しなければならないことが多くある。

また、園側においては日常の保育活動の指導計画を立てることが園運営の基本となる。年間計画、月計画、週計画のもと、その日の保育が行われる。即ち、指導案に基づいて一日の保育が行われているのである。教育実習においても基本となる、その日その時間の指導計画に当たる「指導案」作成に関して、筆者が着目するいくつかの視点で述べていくことにする。

1. 指導案作成の事前の課題

(1) 指導案を書く前に

それぞれの園には、保育（経営・教育）方針がある。その方針をもとに、年間計画、月の計画、週の計画、毎日の計画（案）がある。それらは、それぞれのねらいや発達課題を踏まえたものである。実習生は、既に計画されている中の一コマの指導案を考えることになる。その時のクラスの子どもの実態と担任保育者の考え、ねらい、育てたいこと、大切にしていること、などをよく聞いて、計画を立てることが必要となる。それに沿って、自分の関心あること、活動したいこと、得意なこと、できそうなことを加味しながら指導案に取り組む。

そのためには、まず事前のオリエンテーションで、できるだけ多くの詳しい情報を得る必要がある。具体的には、実習に入るクラスの人数・子どもの様子・クラスの雰囲気・気になる子ども・配慮の必要のある子どもなどである。部分実習や1日責任実習をする場合、その日時・時間帯と時間（主活動）、その前後の保育内容を確認しておく必要がある。

(2) 素案の作成

前述のようにできるだけ多くの情報を把握できている方が良いし、実習生にとっても安心材料になるが、子ども一人一人の情報ははじめ、全てのことが分かることはない。そのため、実習前に把握できている情報を元に「素案」として基本となる指導案を作成しておくことが重要となる。また反対に、素案を作

成することを通して、必要な情報や不足している情報が見えてくる。素案は、一つの内容に絞らず、いくつかのパターンを想定して作成しておく方が良い。実習に入り、提示された条件にあった内容と流れで指導案を作成していくことになる。

(3) 縦割り保育の場合

園の方針に従って、日常的に縦割り保育（異年齢児保育）を実施している場合の指導案は、工夫が必要となる。縦割り特有の配慮事項やメリットを指導案に入れることになる。

以下に、作成に関して踏まえる点を挙げてみる。

- ・年齢別保育にはない年上の子どもと年下の子どもの関わりのメリットを踏まえること
- ・年齢の枠を越えた子ども同士のふれあいや関わりを大切にすること
- ・異年齢の共同作業など、年長児が年少児を支援すること
- ・自分の成長を確認したり、年上としての自覚や自信、責任感を持つ契機となること
- ・年少児への配慮をすること（作業に時間がかかる・使いこなせる教具や道具の準備など）

2. 指導案の形式について

保育の実践事例の資料や「指導案の書き方」といった文献において、多くの指導案が紹介されている。それらの指導案の形式に関して似ているものもあるが、決まった形式がなく、様々なパターンが見られる。その少しの違いに実習生は戸惑ってしまう傾向がある。そのために、「どう書けばいいのか」という形式にとらわれてしまう不安が先行してしまい、「何をこそ書けばいいのか」という大切な部分が後手に回ってしまいがちとなる。

ここでは、本学の実習生が多く関わる長野県内における、指導案（部分指

導・時案)の形式を取り上げて比較してみる。実際の表記には細かい違いがあるが、比較しやすいように一部修正してある。

(1)本学

ねらい				
主な活動内容				
生活の流れ	環境構成	予想される子どもの活動	実習生の活動	実際の姿と反省・考察
(時間)				

(2)H地区の幼稚園

ねらい				
主な活動内容				
生活の流れ	予想される幼児の活動	環境構成・援助	実際の姿と反省・考察	
(時間)				

(3)Sグループ幼稚園

本時の位置				
ねらい				
段階	幼児の活動	指導及び指導上の留意点	評価	環境構成
導入				
展開				
終末				

(4)K短大附属幼稚園

幼児の実態				
ねらい				
生活の流れ	予想される幼児の姿	保育者の指導援助(ねらいと内容を含む)	準備	活動の記録と反省・考察
(時間)				

指導案の横軸の項目は、全体的な内容としてはほぼ同様であるが、個々の用語には表記の違いがある。具体的には、「環境構成」の位置付けが様々である。単独に欄を設ける場合と指導・援助に関わらせながら表記する場合がある。

本学の指導案は、他の養成校や幼稚園の形式を参考にしながら、実習生により取り組みやすい観点で作成したものである。

実習生は、これらの欄や用語の違いに戸惑ってしまうことがある。実習生にとって「何をどこにどう書けばいいのか」分かりにくいという部分がある。しかし、設定する活動の「ねらい」と「活動内容」がはっきりしていれば、指導案の形式の違いにも対応できる。

「ねらい」とは、基本的には幼稚園教育要領にある「幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度など」に関わり、5領域ごとに示されている。

実習生の指導案においては、自分のアイデアや願いをもとに、実習期間中のそれまでに関わった子どもたちの実態を加味して「ねらい」を設定することになる。担当の保育者からの指導を受けながらも、見通しを持ったねらいを設定することは困難であるが、より具体的な「ねらい」の方が取り組みやすいであろう。

「活動内容」とは、「ねらい」の達成のためにすることである。具体的には、子ども自身の活動と実習生の支援が中心になる。実習生なりに実際の動きをイメ

一貫しながら活動を組み立てていくことが重要となる。

3. 小学校教育実習における指導案作成のポイント

小学校以降では、授業プランとしての指導案になるため、指導案を「授業案」や「学習指導案」と呼ぶことが多いが、ここでは「指導案」で通すこととする。以下に、保育における指導案作成の参考になると考えられるポイントとして2点取り上げる。

(1) 教材研究

まず明確にすることは、対象学年は何年で、どんな教材を使って、何を教えるかである。

まず、学習指導要領や教科書をもとに、単元の指導目標や本時のねらいを自分のものにしておく。その上で、子どもの実態（発達段階・学力面・学習意欲など）、学級の雰囲気はどうか、把握する。また、学習内容の前後の状況（どこまで学習し、どこまで理解しているか）や次時にどうつながっていくか、どう発展させていくかの見通しを立てておくことが基本となる。

以下、教材研究に関わる留意点を挙げる。

- ・常に、ねらいを念頭に置きながら授業を進める
- ・「細案」を作成する・・・教師の発問・指示（問いかけ・支援も含む）と子どもの反応を綿密に書き出しておく・・・予想外の反応への対応
- ・教具の工夫・・・目的への効果や子どもの関心を高める手立てとして
- ・模擬授業を行い、付加・修正しながら細案に生かす
- ・支援を必要とする子どもへの配慮とその具体的支援（個別対応）

小学校の教科には、学習指導要領に基づいて作成された教科書がある。しかし、子どもの活動や各校の実態などを重視する「総合」には教科書はない。そこで、各校独自のカリキュラム開発が必要となる。幼稚園のカリキュラムはこ

れに近い面がある。

幼稚園においては、幼稚園教育要領に基づく保育活動を設定するが、教科書はない。子どもの遊び活動を通じた学びを重視するため、この点では、体験活動が中心となる低学年の生活科や教科書のない総合の学びに通じるものがある。

教科書がないということは、逆に教科書の内容に縛られないで、学びの活動を保育者の自由な発想で設定できるという利点がある。保育者の得意分野やイメージを生かせるのである。

(2) 小学校における授業案(学習指導案)

小学校においては、学習指導要領、年間指導計画(年間カリキュラム)をもとに、各学期、各単元の学習計画を立てている。そして本時(45分)で具体的な実践が行われる。この実践計画が授業案である。教科や内容にもよるが、基本的には単元を基本にして、各授業案が構成される。ここでは保育指導案との関連で、授業案の中の本時の部分を取り上げることにする。

<筆者の実践指導案事例>

第4学年 国語科授業案

単元名 『吉四六話』

指導観・教材観 (略)

児童の実態 (略)

単元の目標 (略)

単元の指導計画 (略)

目標(本時) 武士をやっつけた吉四六さんのとんちの面白さを、語り口を通して読み取ることができる

本時の展開（指導計画第二次の第2時「わたしもりの話」）

ステップ	教師の活動	予想される児童の活動	形態	資料
1 5分	<p>・前の時間は吉四六さんがどんなとんちを働かせた話だったかな。</p> <p>・今日勉強する所は？</p> <p>○そうだね。わたしもりになった吉四六さんが武士を相手にどんなとんちを働かすのか、勉強しよう。</p>	<p>・父親を相手にわざと言われたとおりにして、柿を食べた話。</p> <p>・わたしもりの話</p>	全	学習記録用紙 板書
2 10分	<p>○吉四六さんと武士の言い方の違いに気をつけて、読んでみよう。</p> <p>・読みの記号も書こう。</p> <p>(机間巡視をし、音読を聞く)</p> <p>・二人組で交代で読み合おう</p>	<p>・各自で音読する。</p> <p>・音読記号を書き込む。</p> <p>・交代で読み、相手の読み方を聞く。</p>	個 2人	音読カード
3 10分	<p>○ここはどんな感じで読むかな。</p> <p>「わたしちはなんぼか。」</p> <p>「へえ、八文で。」</p> <p>「おさむらい様、行きが六文・・・十二文になりますわい。」</p> <p>「急ぎの用じゃ。・・・向こう岸までとどけてくれい。」</p> <p>○初めと終わりの二人の言葉を比べて、気がついたことがあるかな。</p>	<p>・威張って読む。</p> <p>・控え目に読む。</p> <p>・とぼけたように読む。</p> <p>自信があるように読む。</p> <p>・あわてているように読む。</p> <p>頼むように読む。</p> <p>・武士は初めいばっていたのに、終わりではあわてて頼んだ。</p> <p>・吉四六さんは初め控え目だったけ</p>	全	言葉のカード 板書 板書

		れど、終わりでは自信を持っている。		
4	<p>○なぜ、二人の言い方が変わってしまったのかな。その間の文を詳しく読もう。</p> <p>10分</p> <p>・二人の気持ちも考えよう。</p> <p>「六文にまけい。」</p> <p>「よいよい。さあ、乗らんせ。」</p> <p>「ここまでで六文じゃ。・・・ここでおりてくださらんか。」</p> <p>「そりゃこまる。こんな所におられるか。」</p> <p>「そんなら元の岸にもどるまでじゃ。」</p> <p>○発表してくれた言い方でグループで音読しよう。</p>	<p>・どうしてもまけさせてやる。</p> <p>・舟に乗せれば、しめたものだ。</p> <p>・ここらでしかけてみるか。</p> <p>・(あわてて)何を言い出すんだ。</p> <p>・(強気に)よし、こっちのものだ。</p> <p>・グループごとに役割読みをする。</p>	全	言葉のカード
5	<p>・吉四六さんと武士の立場が逆になってしまったね。</p> <p>・なりきれるグループは音読を発表して下さい。</p> <p>5分</p> <p>○二人の言い方を変えたものは何かな。</p>	<p>・代表のグループが発表する。</p> <p>・吉四六さんのとんち</p>	全	
6	<p>・一番とんちのきいた言葉をノートに書こう。</p> <p>5分</p> <p>・みんな、集中して授業に取り組みました。次の時間の話は。</p>	<p>・とんちを視写する。</p> <p>・うなぎつりの話</p>	個 全	ノート 学習記録用紙

本授業案においては、授業の展開が教材を媒介にして子どもの思考に沿って展開されている。本時の中では、子どもの音読の活動を通してながら、話の内容や登場人物の心情を読み取っていく展開である。

幼稚園の保育においては、遊びを通した学びの展開が中心となるが、本授業のような小学校での指導案の中に参考となる部分があるであろう。例えば、授業の小ステップは、子どもの思考に沿って展開している。一つ一つのステップを踏むことで、学びに集中しながら思考が高まっていく流れである。

また、本授業案は「科学モデル」と呼ばれる、子どもの思考のプロセスを柱にした指導案の形式であるが、遊び活動を柱とする保育においても、「子どもが今何を感じ、何を思い、何を考えているのか」という視点でも参考になる部分があると考ええる。

4. 略案と細案の2段階の指導案作成について（試案）

(1) 略案

略案は、保育（指導）に当たって最低限必要な事項や活動において、重要な事項だけを記述した指導案である。保育者（実習生）の意図に基づく主発問・主指示を中心に、子どもの主活動を加えて構成される。

略案を見て、その時間の保育をイメージできるものでよい。即ち、保育の流れの大筋が分かるものである。まず、アイデアをメモする程度に気軽に取られることが略案の良さである。実習生には、いざ指導案を構想し、実際に書く作業をするまでに「取りかかりのカベ」の傾向が見られ、まず取りかかることで精神的な負担も軽減されるであろう。この略案をもとに、内容を検討し、指導を受け、内容をふくらませていったものが指導案となる。

以下に、具体的に筆者が作成した略案（部分指導案）の例を示す。

○ねらい シャボン玉を作って楽しむ

○主な活動内容 身の回りにあるもので、シャボン玉を作る

流れ	環境構成	予想される子どもの活動	実習生の活動・留意点
10:00		○思い出して答える ○「しゃぼんだま」を歌う	○シャボン玉をしたことがあるか聞く ○伴奏をする
10:10	準備(ストロー①紙コップ・)	○シャボン玉を見る ○用具を受け取る ○ストロー①でシャボン玉を作る	○シャボン玉を吹いて見せる ○用具を配る ○普通のストロー①で作ることを説明する
10:20	準備(ストロー②・紙コップ・針金の輪)	○作り方を考える ○他の用具を使う ・ストロー② ・紙コップ ・針金の輪	○もっと大きなシャボン玉の作り方を考えさせる ○用具を配る
10:40		○巨大シャボン玉を見る ○用具を片付ける	○巨大シャボン玉を作って見せる ○片付けの指示をする

(2) 細案

略案をもとに、できるだけ具体的な内容を記述した指導案が細案である。実習生がこれを見ながら保育を進められるような、台本(シナリオ)的なものであっても良い。ここには、細かい指示や個別への配慮をはじめ、具体的な内容を記述していく。ここでは実際に実習生が言う言葉で表記することも良いとする。

○ねらい シャボン玉を作って楽しむ

○主な活動内容 身の回りにあるもので、シャボン玉を作る

流れ	環境構成	予想される子どもの活動	実習生の活動・留意点
10:00		<ul style="list-style-type: none"> ・「知ってる」 ・「ある」「ない」 ・「知ってる」「知らない」 ・歌う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「シャボン玉って知っていますか？」 ・「やったことがありますか？」 ・「ない友達は、後でやってみようね。」 ・『『しゃぼんだま』の歌を知っていますか？』 ・「一緒に歌いましょう！」「知らない友達は聞いてみましょう」 ・伴奏をする。 ・「上手に歌えましたね。歌のように高く飛ばせるといいね。」
10:10	準備(ストロー①・紙コップ)	<ul style="list-style-type: none"> ・「すごい。」「きれいな。」「やりたい。」 ・用具を受け取る。 ・ストロー①でシャボン玉を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「まず先生がやってみるので、見ていてね。」 ・「今度はみんなでやってみましょう。」 ・ストロー①とシャボン液を配る。 ・「こぼさないようにしましょう。」 ・人に向けないよう、声をかける。 ・楽しく遊ばせる。
10:20		<ul style="list-style-type: none"> ・大きなシャボン玉の作り方を考える。 ・「大きなストローを使う。」 ・「他の道具を使う。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「もっと大きなシャボン玉を作るにはどうしたらいいかな？」 ・意見が出ない場合は、ヒントを出す。 ・タイミングを見ながら、他の用具を使って見せる。

	準備(ストロー②・紙)	<ul style="list-style-type: none"> ・他の用具でシャボン玉を作って遊ぶ。 ・大きさ比べをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・用具を配る。
10:40	コップ・針金の輪	<ul style="list-style-type: none"> ・「もっと大きい。」 ・用具を片付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・巨大シャボン玉を作って見せる。 ・「たくさんのシャボン玉を作れましたね。」 ・片付けの指示をする。

(3) 実践後の修正

実習で作成する指導案には、指導案に加えて実践後に記録する「実際の姿と反省・考察」の項目がある。実習生はここに実践を通じた反省記録を記入することになる。この記録を通して、指導案がより確かな実践的なものになる。

また、この記録が指導案の検証の材料にもなる。以下の観点での分析・検討が考えられる。

- ・教材の価値（有効性）
- ・発達段階の妥当性
- ・指導の進め方・提示の仕方

こうしたことが実習生にとっては、自らが身を持って習得した財産となる。この反省記録をできる限り多く持って、保育の現場に向かうことは重要であり、将来、保育現場に立った際に生かすようにすれば、更に有効であろう。保育現場においても、指導案作成、実践、反省、修正のサイクルで実績を積み重ねていくことが求められる。

指導案作成に際して、まず自分で実際にやってみたり、実物を作ってみる。そのことで工夫の必要性をはじめ、新たに見えてくるものがある。こうした試行錯誤に意義がある。

また、1本の指導案にじっくり取り組むことで、書き方の決まりやコツを知り、

その基本をアレンジすることで、他の指導案に応用できる。この応用力があれば、実習先から異なる形式や書き方を指導されても、比較的スムーズに対応できることと考える。

5. まとめ

教育実習における指導案作成においては、事前の課題を一つずつ克服しながら作成していくことが基本となる。そのためには、指導案に盛り込むべき、より多くの情報を準備し、その情報をもとにねらいと活動内容を形式の中に反映させていくことが重要である。小学校における指導案のノウハウを生かしたり、今回、試案として提示した略案と細案の2段階の指導案作成を参考にしたりしながら、試行錯誤することが基本となる。こうした指導案を作成していく積み重ねを通して、保育者の資質・能力の向上につながることも期待できる。また実践力としての企画力・指導力・子ども理解力にもつながるであろう。

おわりに

本論においては、教育実習における指導案作成に関して筆者が着目した視点で述べてきたが、その他にも様々な視点が考えられる。それらも踏まえながら、総合的に実習生の指導案作成の力がついていくことに今後も取り組んでいきたい。

また、現在、幼保一元化の動きが進んでいる。それに対応した養成校におけるカリキュラムの見直しも始まっている。その中で教育実習の在り方も検討されるであろう。これまでのものに加えて、形式や内容の新たな方向性が示され、実践につながるより良い指導案になっていくよう、今後とも取り組んでいきたい。

【参考文献】

『指導計画の考え方・立て方』久富陽子編（萌文書林）2009

『幼稚園実習 保育所・施設実習』森上・大豆生田編（ミネルバ書房）2004

『教育実習の常識』教育実習を考える会（蒼丘書林）2003

「幼稚園教育実習の現状」塚田まゆみ『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』
第38号 2008

「幼稚園実習における指導案作成の留意点」大滝まり子『北海道文教大学研究
紀要』第32号 2008

「実習日誌・指導案集」長野県短期大学 2009

『山梨県東八代郡（現笛吹市）教育協議会研究紀要』2001